

悲しみの開放

— 菩薩の悲しみに学ぶ —

渡 邊 達 生

Opening up sadness:
Learn from Bodhisattva's sorrow

WATANABE, Tatsuo

キーワード：いじめ、山椒大夫、菩薩、大乘集菩薩学論、シャーンティデーヴァ

1、はじめに

いじめのニュースが絶えない。学校はいうに及ばず、職場、地域社会でも繰り返されている。パワハラや、DVといわれる家庭内暴力、ストーカーなどの被害も繰り返し報道されている。

それらの報道を聞くたびに、被害を受けた方々の悲しみはどのようにしたら回復できるのだろうか、暗澹たる気持ちになる。たとえ、法律の力をもって加害者を罰しても、被害を受けられた方々の悲しみは消えることはないだろう。被害者の悲しみは、どうすれば晴れるのだろうか。

その手がかりを、古代からあった菩薩信仰に求めてみることにした。思えば、日本には昔から観音信仰や地蔵信仰があった。苦しいとき、悲しいとき、観音様や地蔵様に祈ると観音様や地蔵様が救ってくれるという考え方である。観音様は観音菩薩、地蔵様は地蔵菩薩であり、菩薩とは「菩提（悟り）を求める人」という意味で、「人々を救い、仏になる」という誓願を立て修行をしている人である。¹

現在でも、全国各地に、観音様や地蔵様が祀られている。人々が、何かことあるごとにそこに行き、救いを求めて来た証である。苦しみに見まわられた人々は、修行している菩薩を信じ、救いを求めて祈った。そのことにより、安らかな境地になることができた。

いったい菩薩は、どのようにして人々を救ったのだろうか。それを知ることで、菩薩側の視点に立って、悲しみに耐えている自分を客観的に見ることができるのではないか。

菩薩は、仏像の姿で目にするが、その像は信仰するための仮の姿であり、その像の向こう側に本来の菩薩はいる。² さらには大乘仏教³ での菩薩は、「最高の悟りを求める心（菩提心⁴）をおこして自らの修行の完成（自利⁵）と一切衆生⁶ の救済（利他⁷）のために六波羅蜜を行じて⁸ 成仏⁹ を目指す人はすべて菩薩なのである」¹⁰ といわれるように、アクティブな存在なのである。

そして、菩薩は「慈悲の心」で衆生¹¹ を救うといわれている。慈悲の「慈」は他者に利益や安楽を与え（与楽）、「悲」は他者の苦に同情し、これを抜済（抜苦）しようとする思いやりを表す。¹²

そのような菩薩による救済の根拠を、文献から明らかにしたい。それは、人が、菩薩側に立って、自らの苦を救うにはどうすればよいかを認識する機会を得ることになると考える。

菩薩の誕生は、紀元前5世紀ごろのインドで、釈迦が修行したことに始まる。釈迦入滅後には、釈迦がかつてそうしたように菩薩となって修行する僧たちが現れた。その菩薩たちの手によって、紀元1世紀前後から4～500年ほどの間に、『般若経』『無量寿経』『法華経』などの大乘経典が創出され、大乘仏教運動が展開されるようになった。¹³

やがて、シャーンティデーヴァ (Śāntideva, 中国名寂天 7世紀後半¹⁴) は、菩薩の修練の手引きとして『シクサーサムッチャヤ (Śikṣāsamuccaya) 学処要集』を著した。

同書は、当時の数多くの経典を引用し、作者のシャーンティデーヴァが論説を加えたもので、古代インドでの菩薩修行の実際を知ることができるものとなっている。

また、同書はサンスクリット文字で書かれたが、中国に伝わり、宋代(960-1279)に、法護¹⁵や日稱¹⁶の手で『大乘集菩薩学論』として漢訳された。それを書き下し文(中野義輝訳)にしたものが『国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』に所蔵されている。

その文献から、菩薩がどのようにして人々を救おうとしていたのかを読み解き、人が自分の悲しみを開放できる手がかりを得ることにしたい。

2、問題の所在

まず、人々が菩薩に救いを求めて来た様子を、伝説や話の中から浮き彫りにして、人々が菩薩にどのような救われ方を期待していたかを明らかにする。そして、菩薩の側に立って、悲しみの開放を学ぶ観点を立てる。

菩薩信仰が込められている短編小説に、森鷗外作『山椒大夫』(1915年(大正4年)『中央公論』発表)がある。そのあらすじは、以下のようになっている。

厨子王は、母や姉の安寿らと共に、奥州の地から筑紫の国(九州)に向けて旅に出た。いわれのない罪で筑紫の国に左遷され、音信が途絶えた父を訪ねるためであった。しかし、日本海沿岸で人買いにだまされ、母と付き人は佐渡に、安寿と厨子王は丹後の山椒大夫に売られた。安寿と厨子王は山椒大夫一家の者に酷い扱いを受ける。あるとき、逃げ出す相談をしているのがばれて、二人は額に「焼けひばし」を当てられ、火傷を負わせられた。しかし、安寿の持っていた小さな地藏菩薩像に祈ると火傷は消えた。このことがあって、安寿は地藏菩薩像を厨子王に渡すと、厨子王を逃がし、自分は入水して息絶えた。厨子王は何とか逃げのびることができた。そしてその地藏菩薩の御加護があって、厨子王は関白に認められ、やがて丹後の国主となった。厨子王は丹後に行くと、丹後の国での人の売買を禁じた。そして、安寿の弔いを済ませると、休みを願い出て佐渡に行った。役人に頼んで母を探してもらったが、見つけ出すことができなかった。それで、自分ひとりで探しまわった。すると、母とめぐり合ったのであった。そのとき母は盲目となっていた。が、またもや地藏菩薩像の御加護で目が開いた。鷗外はその

地藏菩薩を放光王地藏菩薩と記している。¹⁷

ここには、自分ではどうすることもできない運命に翻ろうされる厨子王一家が、信仰していた地藏菩薩の御加護を受けて、ふりかかる難局を切り拓いていく姿が描かれている。

ところで、昔話にも、『安寿と厨子王』がある。その昔話『安寿と厨子王』には原典がある。『説経節（せっきょうぶし）¹⁸』の「さんせう太夫」である。『説経節』は中世末から近世にかけて行われた民衆芸能で、鎌倉時代や室町時代に庶民の間に語り伝えられていた。それが伝説となって、昔話『安寿と厨子王』になったと思われる。

鴎外は、この『説教節』にあった「さんせう太夫」をもとに、自作の「山椒大夫」を練り上げたのであろう。この二つの話は、母の売られたところが『説教節版』では蝦夷ヶ島（えぞがしま・北海道）で『鴎外版』では佐渡島、また『説教節版』では厨子王を逃がした安寿が拷問を受けるが、『鴎外版』ではそれには触れていないという違いがあるが、おおむね同じである。ところが、丹後の国主となった厨子王の、山椒大夫へ行う処置が大きく違うのである。

『説教節版』では、丹後の国に赴いた厨子王は、山椒大夫を捕え、惨い鋸引きの刑に処した¹⁹。伝説が残る京都府宮津市由良には、山椒大夫の首塚がある。その説明文には、次のように書かれている。

「厨子王丸は恨らみ重なる山椒太夫を引捕え青竹の鋸で首引きの極刑に処した。太夫臨終の折当寺住職の諭しに依り浄菩提心を発し「我れ今より後緒人の奇禍に遭う者あるを見ればそれを救うの誓願を立てん。生来所造の諸悪の罪障この発願に依りて消滅せしめ給え」と唱えて命終したりと云う。後世の人太夫及びその一族の霊を憐れんで供養のために首塚として建てたのがこの宝篋印塔である。南北朝時代乃至室町時代のものであり約六百年を経過している。」²⁰

厨子王は、恨み重なる山椒太夫の首を竹の鋸で引かせるといふ極刑に処した。竹で作った鋸は刃が荒い。だから切れにくい、その分、切られるのは痛い。その鋸を使って首を切るといふ、時間をかけた、残虐な刑罰である。山椒大夫は、少しずつ首を切られながら、最後には、浄らかな菩提心（悟りをもとめる心）を起こして、「わたしはこれからは、災難にあった人を見たらその人を救うという誓いを立てます。だから、今までしてきた悪行を消滅してください」と唱えて絶命した。「死後の世界で菩薩となって、災難に苦しんでいる人々を救うから、それをもって今までの悪行をつぐなわせてください。」これが、山椒大夫の最後の言葉である。それを知った、後の時代の人々が、山椒大夫をあわれんで供養の塔を立てたのであった。

厨子王は山椒大夫を厳しく処断した。山椒大夫は、その刑罰の余りの重さに恐れをなして改心し、仏に助けを求めた。そして、菩薩となるのである。悪人であった山椒大夫も、ついには人を救う善人となった。それを知った後世の人々も浄らかな心を起こした。

ところが、『鴎外版』では違う。丹後の国に赴いた厨子王がしたことは、丹後の国で人の売買を禁じた。ただそれだけである。山椒大夫への処罰は無かった。それで山椒大夫は、使用人に給料を払うことにした。厨子王のしたことは、山椒大夫に対して、遠まわしに、事業を続けたければ給料を支払うようにせよ、そうすれば今までのことは不問に付す、との指示であろう。それだけで山椒大夫を赦したのである。何という寛大な処置であろう。それで、「山椒大夫の家は、農作の匠の業も前に増して

盛んになって、一族はいよいよ富み栄えた」²¹ という。

果たして、厨子王は、それでよかったのか。山椒大夫への恨みは消えたのか。と、疑問をはさみなくなる。また、昔から人々の心のより所となっている勧善懲悪²² の思想に照らしてみても、山椒大夫が今までしてきた悪行をそのままにするという、何だかものたりない、拍子抜けのするような展開である。

しかし、考えてみれば、これほどよい展開は無い。過去は過去、今は今。仏教の教えにある諸行無常²³ の真理、そのものである。過去にとらわれず、気持ちを切り替え、そのときどきを、穏やかな気持ちで生きていく。それでよいのである。『説教節版』では、恨みの仕返しは成ったが、あまりにも重苦しい。かえって、恨みをもつことの、醜さを明らかにしている。それに引き替え、『鷗外版』では、恨みを捨てることの尊さを教えてくれている。国主となった厨子王には、もはや山椒大夫への恨みは無かったのである。『説経版』との差異はどうしてできたのだろうか。そのことを改めて考えてみたい。

『説教節版さんせう太夫』では、山椒大夫を恨んだ厨子王は、山椒大夫に厳しい処置をした。その結果、山椒大夫は死ぬ間際になって悪行を懺悔し、その悪行を消滅させるため、自ら菩薩となって困っている人々を救うという誓願を立てた。そのことが、後世の人々にあわれみの心を起こし、人々は宝篋印塔を立てて山椒大夫を弔った。人々があわれみの心を起こしたのは、その人々自身も救われたからである。山椒大夫は、人々を救ったのである。

『説教節』が流布した時代は、武士の政権が誕生し、戦国時代といわれるようにもなり、力と力がぶつかり合った時代である。強権に虐げられ、人を恨むことが日常的に発生していたと考えられる。そのようななかで、悲しみの開放には、恨みの対象である悪人が自ら懺悔し、改心することが求められていたのであろう。悪人が仏に救いをもとめ、懺悔をして菩薩となるのを見ることで、人々も安心して恨みを捨て、自らを救うことができた。しかし、それを当人に為させるにも、強権が必要であった。ここに、中世の世相が反映された、善を求める人々の姿を見ることができる。

『鷗外版山椒大夫』では、厨子王は、父・母・姉と別れ、一人で生きてゆかねばならない悲しみのなかで、自分にできることは、安寿から渡された小さな地蔵菩薩像に、日々無事に過ごせるよう祈ることであつたに違いない。そうすることで厨子王の心に菩薩への信心が生まれたと考えられる。ところがそのことによって、厨子王の前途には、山椒大夫へ憎しみを抱き続けるのとは違う展開がひらかれていったと考えることができる。その信心の力とは、どのようなものであるのだろうか。厨子王は、自分だけではなく、山椒大夫や、その家で使われていた多くの人たちをも救った。厨子王の生き方に、菩薩の姿をほうふつとさせるものがある。菩薩となって人々を救ったのは厨子王ではなかったか。

鷗外が『山椒大夫』を発表したのは大正時代であつた。大正時代は、後の人が大正デモクラシーと呼んだように、民主主義が尊ばれた時代である。人々の悲しみの開放にも、新しい感覚が求められていたのではないか。悲しみを開放するには、悲しみのもととなっている恨みを捨てる。それによって相手も自分も救われる。それが成熟した社会のあり方だと、鷗外は示したのではないだろうか。

この、『鷗外版』の、菩薩に救いをもとめた厨子王の生き方を、いじめられて悲しみを抱えている人の心の開放の手がかりにすることはできないだろうかと考えた。

そこで、菩薩はどうしてそのようなことができるかを、菩薩修行のテキストであつた『大乘集菩薩学論』を読み解いて明らかにしてみることとした。

その観点は、次の通りである。

- ・菩薩の心のよりどころ
- ・菩薩はどのように人を救うのか
- ・菩薩によって人はどのように救われるのか

以上を、『大乘集菩薩学論』から明らかにして、悲しみの開放の手がかりとしたい。

3、菩薩の修行に学ぶ

『大乘集菩薩学論』（中野義輝訳・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一所蔵）を読み、菩薩の修行として提議されたことから、恨みや悲しみの克服方法を明らかにする。

（1）菩薩の心のよりどころ

菩薩の心のよりどころとはどのようなところにあるのだろうか。経典には次のようにある。

『師子王所問経』に云う。「爾の時に星賀那太子佛に白して言さく、世尊よ、云何んが諸の衆生をして所生の處に在りて常に諸法を愛樂攝受することを得せしめんと。佛の言はく、諸の衆生を解脱せんと欲する者は、常に謙敬を生じ菩提心を起す、是を則ち名けて常に諸法を愛樂攝受することを得と爲す」と。²⁴

世尊=仏の呼称。仏は菩薩の師匠。衆生=迷える人々。法=仏の教え。樂=「ぎょう」と読むことあり。そのときは「ねがう」という意味。愛樂(あいぎょう)=ねがいもとめて。攝受(せつじゅ)=受け入れて教えとする。謙敬=うやまうこと。菩提心=悟りを求める心。解脱=迷いの世界から抜け出す。

『師子王所問経』にいう。この時、星賀那太子が、仏に申し上げた。「世尊よ、多くの人々が、今いる場所で仏の教えを、みずからねがい求め、受け入れて、教えとして取り入れるようになるには、どうすればよいですか」と。すると、仏は答えた。「多くの人を迷いの世界から抜け出させようと思う者は、常に、うやまう心をもって菩提心を起しなさい。そうすることで、人々はいつも仏の教えをねがい求めて受け入れ、自分の教えとするようになります」と。

星賀那太子は菩薩としての修行をしている人であろう。菩薩は人々を救うことを第一義としている。その、人々を救うということは、その救うべき人々が救われたという楽(ねが)いを起こしてこそできることである。だから、星賀那太子は、その方法を仏に聞いたのである。そうすると、仏は人々をうやまうこと、そして、菩提心を起こすことだと告げたのだった。

人をうやまう、そして、菩提心を起こす。これが菩薩のスタートである。うやまうのは、救う菩薩が、救われる人をうやまう、ということである。多くの人を救うのであるから、菩薩は多くの人をうやまうことになる。そして、そのうやまう心は菩提心に注がれる。菩提心とは、悟りを求める心²⁵である。うやまい、その心をもってして悟りを求める心を起こすことで、「常に諸法を愛樂攝受することを得と爲す」とある。愛樂攝受とは、自らもとめ、受け入れて自分の教えとして取り入れることであ

る。それが可能となるための、人々を「うやまうこと」なのである。自分が悟りをもとめているのに、その前提に、救いを求めている人々をうやまうことが設定されているのはなぜだろうか。

菩提心を始めて発したときの様子を、経典は次のように述べている。

『首楞嚴経』に説いていることとして、「某甲の佛の所に於て菩提心を發すに因り、云何んが復少善根を作さんや」と。『賢劫経』に云ふが如し、「…難勝如来堅固歩如来の所に於て初めて菩提心を發したる時、採樵者と為りて少齒木を以て彼の佛に施したるが故なり。功德幢如来妙吉祥如来の所に於て、初めて菩提心を發したる時、攻醫師たり一の菴摩羅果を以て彼の佛に施したるが故なり」。論じて曰く、此の初發菩提心は満足の行に非ずとも、此の訶厭の事猶能く輪転を解脱し無量の樂を得。『慈氏解脱経』に云ふが如し、「善男子よ、譬へば宝有り名けて金剛と日ふが如し、能く一切の貧窮の苦を断ずるが故に。善男子よ。此の一切智心も亦復是の如し、能く一切の輪廻の苦を断ずるが故に」。²⁶

善根=善を為す作用をするもの。 少齒木=つまようじ。 菴摩羅果=果物の実。 訶厭(あえん)=叱る嫌う。 輪転=輪廻(りんね)。 輪廻=迷いの世界をめぐる。 樂(らく)=安樂(あんらく)。 安樂=安らかで心地よい状態。 一切智心=すべてを知っている人の心。

『首楞嚴経』で、「ある仏のもとで菩提心を發することができたら、少しでも善根をつくりだすことができるか」と問題が提起された。『賢劫経』にいられているのが、その答えのようである。「…難勝如来が堅固歩如来の所で、初めて菩提心を發した時は、きこりとなってつまようじを施した。また、功德幢如来が妙吉祥如来の所で、初めて菩提心を發した時は、巧みな医師となって一個の果物の実を施した」。このように、初めて發した菩提心は十分な行いとはいえないが、叱ったり嫌ったりする迷いの世界から抜け出して、はかることのできないほどの安樂を得ることになっている。そのことは、『慈氏解脱経』にいられていることと同じである。「善男子よ、たとえば、生活が苦しくて困っているすべてのことを断つ宝物を「金剛」というが、同じように、この菩提心からできる一切智心も、迷いの世界の苦を断つ。」

悟りを求める心を發した難勝如来は、少善根を發して堅固歩如来に「つまようじ」の布施をした。善根とは、心の中で善を成す作用をするものである。悟りを求める心は、善根となって、他の人に施す、善い作用を起こすようになるという。同じく、功德幢如来は、妙吉祥如来に一個の果物の実を布施した。悟りを求めるのは、自分自身のことである。しかし、自分の悟りを求めることは、自分一人で完結することではない。悟りを求める心は少しの善根をこしらえ、他者に布施をする。そのことが、「此の訶厭の事猶能く輪転を解脱し無量の樂を得」となる。人を叱ったりきらったりする煩惱を打ち砕き、迷いの世界から抜け出して、心が安らかになる。それが悟りである。煩惱を打ち砕くことができるのは、菩提心から成った一切智心が、金剛(ダイヤモンド)と同じようにかたいからで、その一切智心が迷いの世界の苦を断じるのである。

だから、人をうやまうことが必要であった。人をうやまう気持ちをもつことで、菩提心によって起った少しの善根は人に対して施しすることをねがう。そして、その、人を救うという布施が、菩提心を一切智心という強靱な精神に成長させる。その一切智心が煩惱を打ち砕くので迷いの世界から抜け出して悟りを得ることができる、ということになる。

菩提心のはたらきについては、次のように述べている経典もある。

『華嚴經』に云う。「善男子、菩提心は、猶し種子の如し、能く一切諸佛の法を生ずるが故に。菩提心は猶し良田の如し、能く衆生の白淨の法を長ずるが故に。猶し大地の如し、一切の世間を依持する所なるが故に。乃至、菩提心は猶し慈父の如し、諸の菩薩を訓導し守護するが故に。毘沙門の如し、能く一切の貧窮の苦を断ずるが故に。摩尼珠の如し、一切の諸の義利を成就するが故に。菩提心は猶し賢餅の如し、一切の善なる希求を円満するが故に。独鈷杵の如し、畢竟して能く煩惱の冤を推くが故に。猶し正法の如し、能く深心なる諸の作意を断ずるが故に。…善男子よ、菩提心は是の如くの無量殊勝の功德を成就す」。²⁷

白淨の法（びやくじょうのほう）＝浄らかにすること。長ずる＝養い育てる。依持＝存在しつづけるよりどころとしての身体。摩尼珠＝力をもった宝珠。義利＝利益。独鈷杵（どっこしよ）＝密教の法具。深心（じんじん）＝善行を身につけようとする心。煩惱＝身心を乱し悩ませる汚れた心、欲・怒り・無知など。冤（えん）＝ぬれぎぬ。推く＝くたく。作意（さい）＝心をはたらかせること。功德＝よいこと。

『華嚴經』にいう。「善男子よ、菩提心は、ちょうど種子のようなものです。諸仏の教えを生み出すから。菩提心は、ちょうど良田のようです。人々の心を浄らかに養い育てるから。また、ちょうど大地のようです。世の中を支えているから。また、ちょうど慈しむ父親のようです。菩薩を教え導き守ってくれるから。ちょうど毘沙門天のようです。貧しく苦しい生活を断ち切ってくれるから。宝珠のようです。いろいろな福利を受けられるから。賢い瓶のようです。善いことを求める気持ちを満たしてくれるから。独鈷杵のようです。最終的に煩惱による「ぬれぎぬ」をくだけてくれるから。正しい教えのようです。善行を身につけようとする心作用を断ち切ってくれるから。…善男子よ、菩提心はこのようにたくさんの素晴らしいよいことをつくりだすのです」。

自分の悟りを求めるという菩提心は、人々をうやまうという前段があることにより、他の人々や社会に多くのよいことをつくり出すことになり、そのことが自身に力を与えて、煩惱による「ぬれぎぬ」を打ち砕くという。煩惱は、身心を乱し、汚して、欲や怒りなどの苦悩を引き起こす。その煩惱を打ち砕く仕組みを發動させるのが、菩提心である。

悟りを求めるのは、欲や怒りなどの煩惱の支配から抜け出して、穏やかな境地を得るためであるが、それは人々をうやまうことによって起こり、実現できていくのであった。

釈迦牟尼が、臨終のとき、弟子たちに、後に「自燈明」「法燈明」といわれた教えを残している。

「自らを燈明とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、真理（法）を燈明とし、真理をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」²⁸

人々をうやまい、そして、菩提心を起こすことによって、このことが可能となる。人々や社会を救おうとする善根が自らの内面に生まれ、その善根が、それを求める人々に迎え入れられることにより、善根は怒りや欲のなすがままに流されていた煩惱を壊す働きをもすることになる。

しかし、その菩提心の働きは複雑である。先の經典には、次の文言があった。

猶し正法の如し、能く深心なる諸の作意を断ずるが故に。

正しい教えのようです。善行を身につけようとする心作用を断ち切ってくれるから。

善行を身につけようとする心作用を断ち切ることが正しい教えとなるのは、普通に考えると逆である。善行を断ち切ることが正しい…これはいったいどういうことだろうか。菩提心が人々に迎え入れられるようすを見てみよう。

(2) 菩薩はどのようにして人を救うのか

菩薩の、人へのかかわり方について、経典には次のように書かれている。

『最上授所問経』に彼次第を説く、若し先に我執無しと云ふ、則ち是れ菩薩の學處なり。亦『法集経』に云ふが如し。「具壽須菩提、無所發菩薩に語りて言く、善男子、菩薩當に云何んが住すべき。答へて曰く、若し衆生の為に正行を捨せず。問うて曰く、云何んが諸衆生の為に正行を離れざる。答へて曰く、謂く、大慈大悲を捨せず。須菩提の言く、云何んが菩薩の大慈なる。答へて曰く、若し身命及び諸善本を以て、當に一切の衆生に施すべし而も報を求めず。又問ふ、云何んが菩薩の大悲なる。答へて曰く、若し菩薩の菩提を樂欲する、最も一切の衆生を先にして自ら證を取らず」。彼の経に復説く、「此の一切の菩薩の學處は大悲を以て本と為す。世尊畢竟じて彼をして利他を断ぜざらしむ、是れ菩薩の義なり。故に定めて究竟に非ず。是の中我當に大福海を觀じ大義利を施すべし。匪（しか）らざれば定めて一向に違害し生滅す」。²⁹

具壽=長老。 須菩提=スプーティ。釈迦の弟子。 住=とどまる。 捨=平静・無關心。 樂欲(ぎょうよく)=ねがいもとめる。 證を取らず=悟りをとらない。 畢竟(ひっきょう)じて=最終のときになって。 利他=他を利益(りやく)する。 利益(りやく)=福利をはかる。 定めて=まちがいない。 學處=学ぶところ。

『最上授所問経』にこのように説いている。先にわたしは執着が無いと言ったが、これが菩薩の學ぶところである。これはまた『法集経』にいうのと同じである。「長老の須菩提³⁰は、無所發菩薩に問いかけた、善男子、菩薩はどのようにとどまっていればいいですか、と。それに答へて菩薩は答えた。人々の為の正しい行いに無關心でないことです、と。それに対して須菩提はさらに問いかけた。どうすれば人々の為に正しい行いから離れないようになるのですか、と。それに対して菩薩は答えた、大慈大悲であることに無關心ではないことです、と。そこで、須菩提は言った。どうすることが菩薩の大慈となるのですか、と。それに対して菩薩は答えた。身命及び諸善本をもちいて、あらゆる人々に施すことです、そして、見返りを求めないことです、と。すると、須菩提はまた問いかけた。どうすることが菩薩の大悲となるのですか、と。すると、菩薩は答えた。もし菩薩が悟りを求める心をねがいもとめていても、いちばんに、あらゆる人々を先にして、自分は悟りを取らないようにすることです、と」。この経典は、また次のように説いている。「ここにある、あらゆる菩薩の學ぶところは、大悲を以て菩薩修行の本(もと)とすることである。世尊(釈迦)は、最終時(死の時)になっても他を利益する自

分自身をやめさせなかった。そしてこれが菩薩の意義となった。だから、まちがいなく、(他を利益することは) 最終時(死の時)にも止まるものではない。他を利益することに、わたしは大きな幸福の海を觀じとり、偉大な価値のあるものを施すようにしたい。そうしなければ、(わたしは) まちがいなく、ひたすらにたがえ、害をなし、生滅してしまうだろう、と。」

ここでは、菩薩には執着のないことが大切であると説いている。だから、前述の經典にあった「善行を身につけようとする心作用を断ち切る」ことが望ましいのである。善行を身につけようとすることは善いことではあるが、その精神作用に執着しては、見返りを期待するなどの迷いの煩惱を育てることになる。それで、己よりも先に人々を救う、という前提をつけるのである。

迷いの海にいる人々の救われたい心は、いうなれば「悲」であり、煩惱が引き起こした迷いの海にいる状態である。菩薩は、その人々を、うやまいから発した少善根をもって、己よりも先に救う。それが大悲である。大悲は、人々のいる迷いの海を大きな幸福の海に転じることになる。あくまでも、人々のためなのである。そのようにして、人々を救うことで執着心が発することを防いでいる。

それでも、原著の作者シャーンティデーヴァは菩薩に警告する。

論じて曰く、未だ能く餘に於て開示せず、且(しばら)く此の分別に止む。『淨諸業障經』に云く、「凡そ障礙を説いて皆名けて難と為す。佛文殊師利に告げて言はく、云何んが説いて障礙と名く。謂く貪を障と為し、瞋を障と為し、癡を障と為し、布施を障と為し、持戒・忍辱・精進・禪定・智慧皆障礙と為す。所以何んとならば、愚夫異生布施時に於て為に慳惜する者は淨信を起さず、淨信せざるに由りて損害心を發す、損害に由るが故に悔惱の罪を生じ、大地獄に墮つ。彼の護戒者は破戒人の為に諸の誹謗を加へ為に稱賛せず、諸人等をして過失を聞かしめ已つて、淨信を生ぜず、不信に由るが故に即ち惡道に墮す。彼の修忍者は忍に由りて倨傲なり、是の忍昏醉して心を渾濁す、忍昏醉するに由り、放逸の本と為り、即ち苦處に墮す。精進を發す者は便ち我慢を起す、云く、餘の比丘の修行は懈怠なりと、信施の食及び飲水の具を共にせず、精進を發すに由りて我慢を起すが故に、他を輕賤すること彼の愚夫の如し。安禪定者は淨慮三摩鉢底に由り愛樂を發生す、彼便ち是の如く、我三摩地行を得、餘の諸比丘は心に散乱を行ず、何に由りてか佛を得んと、廣く彼に説くが如し」。³¹

開示=迷いの世界を打ち破る。 分別(ふんべつ)=思い悩む。 障礙(しょうげ)=妨げとなるもの。 貪(とん)=欲という煩惱。 瞋(じん)=怒るという煩惱。 癡(ち)=おろかという煩惱。 布施=施しをする。 持戒=戒を守る。 戒=してはいけないきまり。 忍辱=耐え忍ぶ。 精進=雑念をはらって努力する。 禪定=心をひとつに定めて瞑想する。 智慧=真理を悟る。 布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六つは六波羅蜜といわれる菩薩の修行の種類。 愚夫=おろかな人。 異生=普通の人。 慳惜=ものおしみする。 淨信=心をきよらかな方向に向ける。 悔惱(かいのう)=後悔して悩む。 倨傲(きょごう)=おごりたかぶる。 昏醉(こんすい)=くらい。 渾濁=にごる。 放逸=だらしなく悪を受け入れる。 懈怠=なまける。 信施=信者からの布施。 我慢=我に執着する心。 淨慮(じょうりよ)=静かに心を集中する。 三摩鉢底(さんまはつてい)=心を定める³²。 愛樂(あいぎょう)=ねがいもとめる。 三摩地行(さんまじぎょう)=心を一か所にとどめおく修行³³。

論じて曰く、いまだに、迷いの世界を破ることができず、あれこれ思い悩む世界にとどまる修行僧がいる。『淨諸業障經』にはつぎのようにいう。「まったくもって、修行の妨げとなる者の

克服は困難である。佛が、文殊師利菩薩に、どのようなものが妨げとなるか、とおおせになった。すると、文殊師利菩薩が答えた。欲が妨げになり、怒ることが妨げになり、おろかであることが妨げになり、布施をすることが妨げになり、戒をたもつことも妨げになり、耐え忍ぶことも妨げとなり、雑念をはらって努力することも妨げとなり、座禅をして心を一つのことに專注することも妨げとなり、真理を悟ることも妨げになる、と。なぜかといえば、愚かな人や普通の人、布施をするとき、ものおしみの気持ちを起こし、心を浄らかに向けることができない。損をした気になり、後悔して悩む。それは、自ら地獄に墮ちることである。戒を守っている人は、戒を破って地獄に落ちる人のことを非難し、その過ちを人々に言い聞かせるが、そのことで、布施をしても自分の心を浄らかに向ける浄信は生まれず、悪道に墮ちる。耐え忍ぶことをする人も、おごりたかぶる気持ちができてしまう。耐え忍ぶことで暗さにひきこまれ、いつのまにか心はにごる。暗さは放逸の本（もと）となって、苦しみ悩む状態に墮ちる。雑念をはらって努力する人も、我に執着する心を起す。信者がそなえてくれた食べ物や飲み水を共にいただくのは心がだらけると、ひとりだけで精進する者がいるが、それは、そもそも人をいやしむ気持ちが起きているからであり、愚かな人と同じである。安らかに禅定できる人は、静かに心を集中することでこころを定める状態に入り、ねがいもとめたように自我の心を一か所にとどめおく修行に入ることができる。しかし、それができない僧たちがいる。その者たちは禅定しても心は集中しない。どうして、仏の境地を得ることができようか。そのことは、広く説かれていることである、と。」

ここには、迷いの世界を打ち破ることができない修行僧が、紹介されている。欲・怒り・おろか、という煩惱の三毒が迷いの世界から抜け出すことを邪魔する。それが修行中にも出てくるというのである。布施の修行をしていても、ものおしみを起こして、布施をしたことに後悔の念を起すようになるという。また、戒をたもつ修行を熱心に行っていると、戒のいいかげんな者を非難するようになり、心は浄らかに向かわないようになる。さらには、忍辱、精進、禅定、真理を悟る、という六波羅蜜の修行をしていても、おごり高ぶる、執着する、心を集中することができない、という妨げが発するのである。人を救う修行ではあるが、そこには、その目的を遂行しようとする煩惱が顔を出し、自己の都合を押し出してくるのである。いったいそれをどうやって克服すればよいのであろうか。經典には、次のように述べられている。

復次に『如来秘密経』に云く、「爾の時に阿闍世王佛に白して言さく、世尊よ、彼の菩提心を當に云何んが発すべき。佛の言はく、大王よ、謂く、深心不退なるべし。王の言はく、世尊よ、云何んが深心不退なる。佛の言はく、大王よ、謂く、能く大悲を發起するなり。王の言はく、世尊よ、云何んが能く大悲を發するや。佛の言はく、大王よ、謂く、諸の衆生に於て厭捨の心を起さざるなり。王の言はく、世尊よ、云何んが諸の衆生に於て厭捨無きことを得。佛の言はく、大王よ、謂く、若し己の樂に著せずんば厭捨捨無きことを得」。³⁴

阿闍世王＝紀元5世紀ごろのインドのマガダ国王で釈迦の教えに従い仏教教団の保護者となった王。

世尊＝仏の尊称。 深心＝善行を身につけようとする心³⁵。 厭捨＝不平等。 捨＝心を平等にたもたせる心作用³⁶。 著＝執着する。 捨＝ひねる。

また次に『如来秘密経』にいう、「この時に阿闍世王が佛に申し上げて言うには、世尊よ、そ

のような菩提心をどのようにして発したらよいのでしょうか。それに対して、佛が言うには、大王よ、いうならば、善行を身につけようとする心を失わないようにすることです。王が言うには、世尊よ、善行を身につけようとする心を失わないようにするにはどうすればよいですか。佛が言うには、大王よ、いうならば、それには大悲を発起することです。王が言うには、世尊よ、大悲を発するにはどうすればいいのですか。佛が言うには、大王よ、いうならば、多くの人々に不平等感を起させないようにすることです。王が言うには、世尊よ、どうすれば多くの人々に不平等感を無くさせることができますか。佛が言うには、大王よ、いうならば、もし(王が)自分のねがいに執着しなければ、人々は不平等をひねりだすことは無くなります」。

ここには、菩提心から大悲までの過程が示されている。菩提心は己が悟りをもとめる心である。大悲は人々をいちばん先に救うことである。そして、大悲を実現するには、人々に不平等を感じさせないようにすることだという。不平等に感じさせないこと、つまり、平等にすることが、人々の苦を一番に救うことの完成になり、己の悟りを求める心の完成となる、ということである。平等にするというのは、差別化をしない、ということである。このことを合わせて考えると、平等にするとは、人々の苦を己の苦として引き受け、救うことではないかという気がする。そうすることで、菩薩は己のねがいに執着することがなくなる。菩薩のねがいは、菩提心を完成させることである。

菩薩は自分の願いに執着してはならない。そのため的大悲である。だから菩薩は、人々の願いを先に、己の苦として人々を救う。そのことで、菩薩は迷いの世界を打ち破ることができて、人々も救われる。その姿はどのようになっているのであろうか。

(3) 菩薩によって人はどのように救われるのか

経典では、救われている人々のことを次のように紹介している。

『妙法蓮華経』に云ふが如し、「或は石廟を起す有り、梅檀及び沈水木檀并に餘の材磚瓦泥土等もて、若しくは曠野の中に於て土を積みて佛の廟を成ず。乃至童子の戯に沙を聚めて佛塔と為す。是の如き諸人等皆已に佛道を成ず。乃至彩畫して佛像を作る、百福莊嚴の相自ら作り若しくは人を使ふ、皆已に佛道を成ず。乃至童子の戯に若しくは草木及び筆もて或は指爪甲を以て畫きて佛像を作る、是の如きの諸人等皆已に佛道を成ず。若し人塔廟寶像及び畫像に於て、華香幡蓋を以て敬心して而も供養す、若しくは人をして樂を作らしめ、鼓を撃ち角貝を吹き、簫笛琴箏篳篥琵琶鏡銅鈸、是の如くの衆の妙音盡く持して以て供養す、或は歡喜心を以て歌唄もて佛徳を頌す、乃至一小音なるも、皆已に佛道を成ず。若し散乱心にて乃至一華を以て畫像に供養す、漸くにして無数の佛を見ん。或は人有り禮拜し、或は復但し合掌す、乃至一手を挙げ、或は復少しく低頭し、此を以て像を供養す、漸くにして無量の佛を見ん。又云く、若し散乱心にて塔廟の中に入り、一度び南無佛と稱す、皆已に佛道を成ず。諸の過去佛の在世或は滅後に於て、若し是の法を聞くもの有らば、皆已に佛道を成ず」。³⁷

石廟を起す=石塔(釈尊の供養塔)を建てる。梅檀(せんだん)=木の名。沈水木=香木。檀(みつ)=じんこう(木の名)。并=ならべる。百=多くの。福=福利をもたらすもの。莊嚴(しょうごん)=飾る。佛道を成ずる=仏の教えを完成させる。簫笛琴箏篳篥琵琶鏡銅鈸=笛や琴や

銅鑼。にぎやかに音曲を奏でること。

(それは)『妙法蓮華經』にいうのと同じようなことだ。「石塔を建てる人がいた。梅檀や香木の檜を植え、瓦や土等をも用いて広い野原の中に佛塔を建てていた。また、子どもが遊びで、砂を集めて佛塔を作っていた。このような人たちが、佛の教えを完成させる人たちである。または彩色した仏像の絵を描く人がいた。多くの福利をもたらす物で飾りたてた佛の姿を自分で描き、または人を使って描かせていた。この人たちも佛の教えを完成させる人たちである。また、子どもが遊びで、草木や筆を使って、あるいは指や爪や手の甲を使って、佛像を描いていた。この人たちも佛の教えを完成させる人たちである。もし人が塔廟の宝像や描いた像に華の香や幟旗をささげてうやまい供養する、または人に音楽を作らせ、太鼓を打ち角貝を吹き、笛や琴や銅鑼の音ですばらしい音を奏でて供養する、あるいは歓喜の心で歌って仏の徳をほめたたえる、たとえ一小音であっても、このような人たちは、しばらくして無数の佛を見るだろう。あるいは、禮拜し、あるいは、なにげなく合掌する、または、一手をかかげ、あるいは少し頭を低くして、像を供養する人、このような人たちもしばらくして多くの佛を見るだろう。また経典にいうには、もし、なにげなく塔廟の中に入り、一たび南無佛となえた人がいれば、皆すでに佛の教えを完成させる人たちである。諸々の過去佛の在世或は滅後に、この仏の教えを聞くものがいたら、皆已に佛の教えを完成させる人たちである。」

ここには、人々が自ら進んで心を浄らかにしていく姿が示されている。大人も子どもも、それぞれの器量に応じて、心が落ち着くままに、また、心の命じるままに仏を供養している。仏や菩薩が人々の目の前に現れ、導きの言葉を発することはない。しかし、人々が救われていること、そして、人々の心の浄化に仏の力が作用していることは確かである。それをどのように理解したらよいのであろうか。経典には次のように書かれている。

又『大悲經』に云く、「佛阿難に告げたまはく、譬へば漁師の魚を得んが為の故に、大水の池中に鉤餌を安置し、魚をして吞食せしむるが如し、魚吞食し已る、所以何んとならば、然も知る、此の魚尚池中に在るも久しからずして當に出づべし、復是の如く知る、彼の堅鉤の為に竿繩中る所岸の樹上に繋ぐ。時に捕魚師既に共の所に到る、即ち竿繩を験し魚を得たことを知り已わる、便ち鉤繩を拽きて岸上に敷置し、共の所欲の如くに之を受用す。佛阿難に告げたまはく、我今亦復是の如し、諸の衆生をして佛世尊に於て心に淨信を生じ諸の差本を植えしむ、乃至一の信心を以て、彼の諸の衆生餘の悪業の覆障する所となり刹那に墮落すと雖も、若し佛世尊彼の衆生に於て菩提の智を以て攝事の繩を執り、輪廻の海に於て諸の衆生を抜きて涅槃の岸に置く」。³⁸

阿難=仏の弟子。 鉤餌=えさのついたカギ針。 淨信=きよらかな方向に進む心。 差本=癒えるもと³⁹。 信心=仏の教えを信じて疑わない心⁴⁰。 菩提の智=悟りに向かう智慧。 攝事=めぐみを受け取る。 輪廻の海=まよいの世界。 涅槃の岸=悟りの境地。

また『大悲經』にいう。「佛が阿難に告げた。たとえば漁師が魚を得ようとして、大水がたまる池の中に餌のついた鉤針を置いておいて、魚に呑みこませる。餌を飲み込んだ魚は、池から出なければならぬ。鉤針の先の竿の繩が岸の樹につながっている。しばらくして漁師がやっ

て来る。そして、しかけていた竿縄で魚のつれたことがわかる。漁師は鉤縄を岸の上にひきあげ、もとめていた魚を受け取る。阿難よ、わたしがしていることは、このようなことだ。わたしは、多くの人々に、浄らかに進む心を生じさせ、心に癒えるもとを植える。それで、その人々はひとつの仏の教えを信じて疑わない心をもつようになり、(たとえ) 悪業に覆われて一瞬の間に墮落するようなことがあっても、わたしは仏の悟りの智慧で、めぐみを受け取れる縄を持って、その人を迷いの世界から釣り上げ、悟りの境地に置くのだよ。」

芥川龍之介作の小説『くもの糸』を連想させる仏の姿である。仏は多くの人々に救いの手を差し伸べている。それは、人々に浄らかな方向に進む心を生じさせる、というものである。その浄らかなは、先の経典の例でいうと、石塔を建てること、子どもが砂で戯れに佛塔を作ること、仏像の彩色した絵を描くこと、子どもが遊びで草木をつかって佛像を描くこと、塔廟に華の香や幟旗をささげて供養すること、すばらしい音楽を奏でて供養すること、あるいは歓喜の心で歌って仏の徳をたたえること、何気なく一花を描いて像に供養すること、禮拜して像を供養すること、なにげなく塔廟の中に入り南無佛となえること、諸々の過去佛の在世或は滅後にその仏の教えを聞くこと、などで生じることがわかる。

人々がそのように仏を供養するのは、それが仏の働きによるものであるからである。そして、心が浄らかになることを確認する。人々はそうやって、仏の教えを信じて疑わないという信心をもつことで、迷いの世界から抜け出すことができる。

では、そのような人々の姿を見た菩薩には、おごり高ぶりや執着は、発生しないのであろうか。先述の経典には、布施や自戒、精進や忍辱で、それを併発してしまうことの難点が指摘されていた。そうはならないための工夫があるか、経典を見てみる。

『又善諫経』に云く、「佛の言はく、大王よ、汝若し謂はん、多種の作を作すは未だし、我一切の行の中に一切の行を行じ、一切處の中に一切處を利す、謂く布施波羅蜜多を学び、是の如く乃至般若波羅蜜多を学ぶ若きはと。大王よ。是の故に汝三藐三菩提に於けるも亦復是の如し。樂欲して浄信を発生し意願して利他せよ。行往坐臥、若しくは夢覚むる時、若しくは飲食の時、而も常に具足して隨念に作意せよ。諸佛菩薩声聞縁覚諸の異生身等の積集せる過去未来現在の一切の善根を觀察し、称量し已つて和合し已り、應に隨喜すべき者には自ら現前して隨喜す、乃至虚空界に遍じ涅槃界に遍じて亦自ら隨喜す。又復一切の諸佛菩薩縁覚及び声聞衆の供養の事業に隨喜し、平等に一切の衆生に廻向し、乃至諸の衆生をして一切智智を得せしむ。普く皆諸佛の善法を円満し、日日三時に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。大王よ、汝是の如くの正行を以て王者の名を得れば宝位を捐てず、菩提の行を求むるも亦円満することを獲」と。⁴¹

三藐三菩提 = (さんみゃくさんぼだい) 悟りの智慧。 樂欲 = ねがいもとめる。 浄信 = 心を浄らかな方向に向ける。 意願 = ねがいもとめる。 利他 = 他を利益する。 利益 (りやく) = 福利。 行往坐臥 = 行じる・とどまる・すわる・横になる、日常的な立ち振る舞い。 声聞縁覚 = 小乗の修行僧。 異生身 = 普通の人。 善根 = よいことをしようとする心のはたらきをおこすもの。 隨喜 = 歡喜。 虚空界 = 真如の世界。 涅槃界 = 悟りの世界。 供養する = 尊敬の念をたむける。 廻向 (えこう) する = 功德を悟りの方向へとさしむける。 一切智智 = 最高の智慧。 善法 = 善の教え。 円満 = 行き渡らす。

阿耨多羅三藐三菩提 (あのくたらさんみゃくさんぼだい) = 悟りの智慧。 捐 = すてる。

『善諫經』には次のようにいう。「佛は言われた。大王よ、あなたは、言うかも知れません。多くの善の種を作ることはいまだにしていないから、布施波羅蜜多から般若波羅蜜多までを学び、あらゆる修行を行って、あらゆるところで人に福利を与えるようにしたい、と。大王よ。そうです、あなたが悟りの智慧を得るにはそうすることです。ねがいもとめて心を浄らかにし、そうしようと願って他者に福利を与えなさい。修行をしているとき・じっとしているとき・座っている時・横になっている時、瞑想から覚めた時、飲食の時。そのようなとき、いつも戒に気をつけ、しかも、そのようにしてきたことを忘れないように心がけなさい。そして、諸佛、菩薩、小乗の修行僧、さらには一般の人の生きとし生ける者が、それまで蓄積してきた過去未来現在の、あらゆる善根を觀察し、把握して、歡喜に値する者の前に現われて歡喜しましょう。また、真如の世界や悟りの世界の隅々まで心を行き渡らせ、歡喜しましょう。さらには、あらゆる諸佛・菩薩・小乗の修行僧たちを尊敬し、歡喜して、あらゆる人々に、平等に功德をさし向け、あらゆる人々に最高の智慧をほどこしましょう。皆に広く諸仏の善の教えを行き渡らせて、毎日、三回、自分の智慧にその功德を差し向けましょう。大王よ、あなたが、このような正しい行いをする王者という評判を得れば、王という位は宝の位となって続くのです。そうすれば悟りの智慧は十分に満たされるのです。」

この經典は先述の經典を発展させている。先述の經典では、人々を救うことに執着をもってはならないという教えがあった。しかし、この經典では「樂欲して淨信を發生し意願して利他せよ」という。「ねがいもとめて心を浄らかにし、そうしようと願って他者に福利を与えなさい」である。ここでは、執着をもつことを恐れず、積極的に人々の救済にあたることを求めている。そして、その後が続くのが次の文言である。

又復一切の諸佛菩薩緣覺及び聲聞衆の供養の事業に隨喜し、平等に一切の衆生に廻向し、乃至諸の衆生をして一切智智を得せしむ。普く皆諸佛の善法を円満し、日日三時に阿耨多羅三藐三菩提に廻向する。(回向し、回向する、に下線、筆者)

さらには、あらゆる諸佛・菩薩・小乗の修行僧たちを尊敬し、歡喜して、あらゆる人々に、平等に功德をさし向け、あらゆる人々に最高の智慧をほどこしましょう。皆に広く諸仏の善の教えを行き渡らせて、毎日、三回、自分の智慧にその功德を差し向けましょう。

ここに、「回向(えこう)」という思想がある。回向とは、功德を悟りの方向へとさし向けることである。しかし、悟りは己の煩惱を退治して功德を積むことで実現できる。そのために人々を救い、己に功德(果報)を積む。功德が集積されることで煩惱は退治され、悟りを得ることができる、となるのである。ところが、己に功德を積むと執着が起きるようになる。そこでの、回向である。

回向は、己の得た功德を己に集積するのではなく「さし向ける」のである。さし向ける方向が、上記の經典の文言には二ヶ所出てくる。「平等に一切の衆生に廻向し」「阿耨多羅三藐三菩提に廻向する」。あらゆる人々に平等にさし向けることと、阿耨多羅三藐三菩提にさし向けること、となっている。阿耨多羅三藐三菩提とは、サンスクリット語の *anuttarasamyaksam bodhi* の音を漢字で表記したもの(音写)で、意味は「悟りの智慧」である。悟りの智慧は己の中に形成される。

このことからすると、菩薩は、己の得た功德をあらゆる人々にさし向け、それとともに、己の中に

ある悟りの智慧にもさし向けることがわかる。そのことによって、おごり高ぶりや執着という煩惱の働きを封じることができる。また、それとともに、人を救うことが己の智慧を深めることになり、それによって悟りを得ることができる、という菩薩の生き方を確立することができる。

また、その回向のもととなる功德を得るには、「観察」することが需要であると経典はいう。

諸佛菩薩声聞縁覚諸の異生身等の積集せる過去未来現在の一切の善根を観察し、称量し已つて和合し已り、應に隨喜すべき者には自ら現前して隨喜す、乃至虚空界に遍じ涅槃界に遍じて亦自ら隨喜す。(観察に下線。筆者)

諸佛、菩薩、小乗の修行僧、さらには一般の人の生きとし生ける者が、それまで蓄積してきた過去未来現在の、あらゆる善根を観察し、把握し終わって、歡喜に値する者の前に現われて歡喜しましょう。また、真如の世界や悟りの世界の隅々まで心を行き渡らせ、歡喜しましょう。

隨喜すべき善根を觀察して隨喜する（歡喜する）ことで、功德を積むことができる。その觀察眼はどのようにして身につければよいのだろうか。それに関して、経典は次のように述べている。

又『法集經』に説くが如し、「眼と色と本諍あること無し、是の如く、耳と聲と、乃至、意と法とも亦諍あること無し。云何んが眼と色と諍ふ所有ること無きや、二和合を以て相違せざるが故なり。乃至、意法の二相の和合も亦復是の如し。若し和合せざれば則ち諍ふ所有り。世尊、法に二有ること無し、是の故に諍はず。諸法二無く各相知らず、相知らざるに由りて則ち分別無し。若し分別を離るれば則ち生滅無く、増減有ること無く、愛樂を生ぜず亦厭患無し、輪回到住せず、涅槃に著せず。世尊、若し諸法に於て樂はず厭はず、應に知るべし、則ち染淨相無し。世尊、若し是の如く我知る、是の如く我覺ると言はず、皆是虚妄の分別する所なり。世尊、若し復此の眼等の諸法に於て善く了知し已れば、是の念を作さず、我能く分別すと。當に知るべし、是の人物と諍はず、則ち能く沙門の道行に隨順す、法を見る者と爲す、佛を見る者と爲す、衆生を見る者と爲す、空性を見る者と爲す。世尊、見、見る所無し、是を諸法無見と名く。」

42

色（しき）＝形あるもの。 諍（じょう）＝議論してあらそうこと⁴³。 意＝心。 法＝仏の教え。 和合＝独立した原理を関係づける原理⁴⁴。 分別＝推量・思惟すること。精神作用が対象にはたらきを起こし、その相をとって思いはかること。 生滅＝生起と滅尽。あらゆるものは移り変わるもの（無常）であるから必ず生滅がある。しかし、空性をもって観ると、あらゆるものは不生不滅となる⁴⁵。 愛樂（あいぎょう）＝ねがいもとめる。 厭患＝きらいなやむ。 染淨相無し＝対になっている汚染と清淨がともになくなる。 虚妄（こもう）＝真実でないこと⁴⁶。 沙門＝修行者。 空性＝すべては因縁によって生じたもので、実体はないとするもの見方⁴⁷。 因縁＝因と縁。結果を生じさせる内的な原因が因で、外からこれを助ける間接の原因が縁⁴⁸。 見＝理解。

（それは）又『法集經』に説いていることだ。「眼と形あるものとは、あらそいはない。このように、耳と耳に聞こえる声も、心と仏の教えもまた、あらそうところがない。どうして眼と形あるものとはあらそいがないのだろうか、それは、その二つが関連づけられるからである。心と仏の教えが関連づけられるのもまた同じことである。もし、関連づけられなければ、あら

そいがあることになる。世尊よ、教えに二つはない。だからあらそいはない。仏の教えに二つはなく、それをともに知らないから、そのことを思わない。もし、思いから離れれば、思いが起きたり消えたり、増えたり減ったりすることはなく、(それぞれに)ねがい、もとめることも生まれず、また、きらったり、なやんだりすることもなく、迷いの海にとどまることはなく、心を穏やかにしようと執着することもなく。世尊よ、もし仏の教えに従って、ねがわず、きらわず、でいれば汚染も清浄もない。世尊よ、もしわたしがこのように知った、このようにわたしは覚ったと言ったら、それは、真実ではない思いである。世尊よ、もし、これもまた、眼等の教えでよく理解すれば、このようなことを考えることはせずに思うこと(思惟すること)ができる。だから、知らなければならない。この人とあらそわず、仏弟子の道を共に歩いている、仏の教えを理解している人であると見なす、仏を理解している人であると見なす、衆生であることを理解している人であると見なす、空性を理解している人であると見なす。世尊よ、その理解は、理解するところがない、これを諸法無見という。

ここにあるのは、思うことの深さである。あらそうというのは自己の心の中のできごとで、あらそいがあるということは、迷いがある、迷いの世界にいる、ということであろう。その、あらそうところがない状態が、悟ることができた状態である。しかし、わたしがこのように覚ったと思ったときには、それは真実ではないのである。煩惱が関与している。真実の悟りを得るには、目がかたちあるものをあらそわないで受け入れるのと同じように、自己の心を仏の教えと関連づけることだという。だから、知らなければならないとして、以下の文言が続くが、ここに出てくる、「是の人物」とはだれのことであろうか。

當に知るべし、是の人物と諍はず、則ち能く沙門の道行に隨順す、法を見る者と爲す、佛を見る者と爲す、衆生を見る者と爲す、空性を見る者と爲す。世尊、見、見る所無し、是を諸法無見と名く。(是の人物に下線、筆者)

だから、知らなければならない。この人とあらそわず、修行者の道を(仏と)共に歩いている、仏の教えを理解している人であると見なす、仏を理解している人であると見なす、衆生であることを理解している人であると見なす、空性を理解している人であると見なす。世尊よ、その理解は、理解するところがない、これを諸法無見という。

思うに、「是の人物(この人)」とは「自己」のことではないか。自己と議論せず、自己を、修行者の道を(仏と)共に歩いている人、仏の教えを理解している人、仏を理解している人、苦に悩む人々を理解している人、空性を理解している人、と客観的に見る。このように、自己を客観的に見ていくことで、煩惱のはたらきを抑え、目がかたちあるものを眼に係づけて見るのと同じように、心は仏の教えを自己に係づけて、悟りを得ることができる。これも「思う」ことによって、実現できていく。

思うことは、煩惱の働きを起こして悩みをますます深くもするが、仏の教えと関係づけることによって、解脱することもできる。それが、観察する、ということであろう。

しかし、「その理解は、理解するところがない」という。自分を、仏の教えを理解している人、と見ることはできるが、その「理解」は理解するところがない、とはどういうことであろうか。

仏の教えに三法印といわれる、三つのしるしがある。

諸行無常 「あらゆる現象は変化してやすまない」
諸法無我 「いかなる存在も不変の本質を有しない」
涅槃寂靜 「迷妄の消えた悟りの境地は静かな安らぎである」⁴⁹

あらゆる現象は無常で「変化をしてやすまない」のであり、いかに存在も「不変の本質を有しない」のである。そして、その境地に至ることができたとき、悟りを得ることができる。

そこにある仏の教えは、眼で見ることが出来る「色（しき）」のように、はっきりとした形にとどまっていることはない、だから、仏の教えは理解するところがない、ということであろう。

しかし、その仏の教えを観察するのである。そのことをどのようにイメージするとよいのだろうか。そのことに関して、原著の著者であるシャーンティデーヴァは、次のように述べている。

論じて曰く、此を清淨の福行を積集して而も菩提を成ずと名く。清淨の慈を以て有情を縁ず、善く觀察し已つて衆生の相無し。若し復十方の善逝を供養す、彼の二足尊已に垢染を離れ亦見るべからず。應に苦惱の衆生を供養すべし、是れ調御師の教勅する所なり。人中の上供而も以て之を施し大悲心を以て衆苦を拔除し、安隱の樂を獲、淨慧を發生して煩惱を断除す。此の正理に於て善く了知し已つて當に疑惑を離るべし。是の如き供養の果得難からず。佛の正教を教の如くに了し、身念八聖道を觀じ、諸の痕染を断じ、常に己身を捨てて諸佛を承事すべし。世間諸天の妙樂を希はず、奢摩他毘鉢舍那若しくは寂遍寂を修し、爲に苦道を出づ。⁵⁰

清淨=けがれの無い。菩提=悟りの智慧。これを得たものが仏であり、これを目指す有情（衆生）を菩薩という⁵¹。慈=与樂⁵²。十方=東・西・南・北・東南・西南・東北・西北・上・下の十の方角。

善逝（ぜんぜい）=迷いの世界をよく超えて出て、再び迷いの世界に還らないもの。仏陀のこと⁵³。二足尊=二足とは願と行、あるいは福と慧で、これらをそなえている者。仏陀のこと。調御師=御者が馬を調御するように、衆生を調伏して悟りに至らせる者。仏陀のこと。⁵⁴ 教勅=釈迦の教え。上供=供物をたてまつる。正理=論理学⁵⁵。身念の行=身念処。淨の顛倒（てんどう=誤った見方）を打破するため、身体の不淨性を觀察する修行⁵⁶。不淨である現実存在を淨ととらえてそれに執着（しゅうじゃく）している淨顛倒を打破するための修行⁵⁷。八聖道（はっしょうどう）=苦の滅に導く八つの正しい実践徳目。①正見（しょうけん=正しい見解）、②正思（しょうし=正しい思惟（ゆい））、③正語（しょうご=正しい言葉）、④正業（しょうごう=正しい行い）、⑤正命（しょうみょう=正しい生活）、⑥正精進（しょうしょうじん=正しい努力）、⑦正念（しょうねん=正しい思念）、⑧正定（しょうじょう=正しい精神統一）の八つをいう⁵⁸。痕染=傷跡の残る汚染。煩惱のこと。妙樂=極樂世界。希う=ねがう。奢摩他（しゃまた）=心を一つの対象に止めて想念を息（やす）め、心を凝らすこと⁵⁹。毘鉢舍那（びばしゃな）=觀。知恵によって対象を正見すること⁶⁰。

論じて曰く、これをけがれをなくす福行を積集して悟りの智慧を完成させる、という。けがれの無い安樂と、苦惱に満ちた人々とを関連づけてよく觀察すると、人々の苦惱はなくなる。もしあらゆるところにいる善逝を供養すれば、その福と智慧をそなえた方々には煩惱の汚染は見ることができない。（そこで）苦惱にあえぐ人々を供養しよう。これは仏陀の教えるところである。苦惱に満ちた人々が供物をささげて施しをする、（菩薩は）その人々の苦惱を大悲心で抜くことで安樂を得て、淨らかに向かう智慧が發生し、煩惱を断つことができる。この論理を

理解して、疑惑をもつことをやめよう。このような供養の成果を得ることは難しくはない。仏の正しい教えを教えとして承知し、身念の行や八聖道の行でよく観察して、いろいろな煩惱の痕跡を断じ、常に己身を平等にたもって、いろいろな仏からの功德を承るといい。世の中でいわれている神々の極楽を願うのではなく、想念をやすめて心を集中させ、智慧によって正しくものが見えるようにして心が穏やかになれば、苦の道を抜け出すことができる。

観察は、供養することでできるという。その供養先は二つある。

若し復十方の善逝を供養す、彼の二足尊已に垢染を離れ亦見るべからず。應に苦悩の衆生を供養すべし、是れ調御師の教勅する所なり。(供養に下線、筆者)

もしあらゆるところにいる善逝を供養すれば、その福と智慧をそなえた方々には煩惱の汚染を見ることができない。(そこで) 苦悩にあえぐ人々を供養しよう。これは仏陀の教えるところである。

一つは仏陀への供養であり、二つめは苦悩にあえぐ人々への供養である。まず仏陀を供養する。そして、仏陀の福と智慧をそなえ、煩惱に汚染されていない状態を観察する。次に、苦悩にあえぐ人々を供養し、その人々と迷いの世界から出て行くことができた仏陀と関連づけて観察する。すると、人々の苦悩はなくなるという。また、そのようにして迷える人々を救うことによって、浄らかに向かう智慧が発生して、(菩薩も) 煩惱を断つことができるという。そして、それが「正理」だという。その「正理」とは、いったいどういう理論なのであろうか。

供養するとは、尊敬の念をもつことである。尊敬の念をもって、仏陀を観察すると、仏陀の悟りを得た状態を見ることができよう。仏陀が悟りを得た状態とは、煩惱の働く余地のない、縁起によって成り立っている姿である。次に、苦悩にあえぐ人々たちにも尊敬の念をもち、その人々たちを観察する。すると、苦悩にあえいでいる人々たちの縁起のなかに仏陀を観ることができ、ということが起きるのではないか。苦悩にあえいでいた人々は、仏陀による縁起があると理解できたとき、救われることを自覚できるであろう。菩薩は、観察によって、悟りを得た仏陀と、苦海にいる人々とを縁起によって結び付けることができる。それはまた、菩薩自身の縁起に、仏陀や、救われた人々が加わるということになる。それで、菩薩は煩惱を断つことができる。

これが、上記の文言の中の、「此の正理に於て善く了知し已つて當に疑惑を離るべし。」(この論理を理解して、疑惑をもつことをやめよう。) という「正理」であろう。

そのようにして、縁起⁶¹を観察できるようになるには、縁起を成立させる空性が観察できなくてはならない。そのための手立てが、身念の行であり、八聖道であるのであろう。

身念の行とは、身体の不浄性を観察する修行⁶²である。だれもが病気にかかる、死が訪れる、などの不浄性をそなえている。しかし、そのようななかで健気に生きている。それらを観察することで、浄への常見や、死への断見に陥ることのない空性への理解が進むのではないか。⁶³

また、八聖道とは、正見(しょうけん=正しい見解)、②正思(しょうし=正しい思惟)、③正語(しょうご=正しい言葉)などの、八つの正しい実践徳目を、実際に心がける日々をふみおこなうことである。これも、実際の場面を経ることで、常見・断見克服の観察眼に深みが増すこととなろう。

このような実践を通して、そのときどきに観察した己の煩惱を絶つ努力をすることで、精神を穏や

かな状態にすることができよう。これは、現代の一般の人々にもいえることである。

また、上記の文言には、そのように煩惱を絶つ努力をした後に続く言葉に、

常に己身を捨てて諸佛を承事すべし

常に己身を平等にたもって、いろいろな仏からの功德を承るといい。

とある。「捨」の意味は、「心をかたよらせず、平静、平等に保たせる心作用」⁶⁴ である。ものをすてることによって心を平等にたもつ。それをもとめている心。これが「捨」である。そうすることで、いろいろな仏からの功德を承ることができるようになる。ここにも、見るべき視点がある。

人は、いろいろな煩惱をかかえる。悲しみも、そのような煩惱によっておこる。悲しみがずっと続くと思うから悲しみの中に沈み込んでしまう。自分はもうダメだと思うから落ち込む。それは、心をかたよらせているのである。その常見・断見を離れることで、心は平等となる。

それを行うのが大悲ではないか。人の苦を自分のこととしてとらえることが、自分のかたよりを捨てることになる。そして、仏の功德を承ることができるようになる。平等であろうとすることで人も自分も救われる。そのことを、仏や菩薩は知らせてくれている気がする。

4、まとめ

悲しみの開放の手がかりを菩薩信仰にもとめてきた。厨子王は、自分を逃がしてくれた安寿が死んでいたことがわかったとき、大きな悲しみに覆われたことだろう。そこに追い込んだ山椒大夫を恨みもしたことだろう。安寿に渡された地蔵菩薩像を見て、安寿の無念さを晴らそうと誓ったに違いない。

しかし、地蔵菩薩像を見ているうちに、心が「信」の状態となり、自分が迷いの海にいること、そして、迷いの海にいるのは山椒大夫も同じだということをさとしたのではないだろうか。

信には、「心を澄んだ浄らかなものにする心作用」⁶⁵ という説明がある。菩薩の修行の始まりも、その「信」であった。人をうやまい、菩提をもとめようとする。菩薩の修行はそこから始まるのだった。厨子王の山椒大夫に対する姿勢も、そうであったのではないだろうか。

経典の中に、子どもが砂遊びで仏塔を作ったり仏像の絵を描いたりすることや、遊びで草木をつかって仏像を描くことで、心が浄らかになっていくことが示されていた。その浄信が起きるのは、仏が、悩める者を迷える海から釣り上げようとしてくれているはからいによると考えることができる。

厨子王は、安寿にもらった小さな地蔵菩薩像を見ているうちに、そのような仏のはからいによって、浄信を抱くことができたと考えられる。心が浄らかになると、観察できることが深くなる。

文献には、けがれのない安楽を与えることと、苦悩に満ちた人々とを関連づけてよく観察すると、苦悩はなくなる、とあった。「縁起」への気づきである。厨子王には、けがれのない安楽を与えてくれているのが地蔵菩薩である。観察のなかで、苦悩に満ちている自分（厨子王）に、菩薩の縁起が働いていることが感じられてきたのではないだろうか。

悲しみも、そうやすやすとは無くならない。悲しみに打ちひしがれた状態が続いたであろう。もうダメかもしれないと落ち込んだこともある。しかし、菩薩はあらゆる人々にけがれのない安楽を与

えてくれる。その菩薩の姿勢を観察することで、この悲しみがずっと続くという「常見」や、もうダメだという「断見」を克服できていったのではないだろうか。また、そのようにして心が澄むようになっていった厨子王には、山椒大夫も迷いの海にいることに気づいたのではないだろうか。そして、菩薩がそうであるように、自分を救うことよりも先に山椒大夫を救おうと考えた。

これが、「捨」であり、「平等」である。それを実行するのが回向である。自分に積んだ功德を人にさし向ける。そうすることで、その人も救われ、自分も救われる。

厨子王は、地蔵菩薩の御加護によって、京都で出世をして丹後の国主となった。これで、山椒大夫への恨みを果たすことはできる。しかし、それは煩惱の執着によることでしかない。ここで、自分に授かったよいこと（功德）をひとり自分のものにしてしまうと、執着が始まり、おごり高ぶりのある自分になるのである。心を淨らかに向かわせていた厨子王は、そうなることを自ら避け、自分に授かった功德を、山椒大夫に向けようとしたのではないか。それが回向である。

当の山椒大夫は、とがめのないことに驚いたであろう。そして、人買いを禁じるという決まりを出されたので、事業を継続するためには使用人たちと雇用契約を結ばざるを得なかった。ところが、給金をもらえるようになった使用人たちはうれしくなって精を出して働いた。そのことで山椒大夫の家は栄えた。ここにあることは、山椒大夫にむけられた功德が、山椒大夫にはもちろんのこと、使用人たちにも向けられるようになったと、と考えることができる。

さらには、この後、厨子王は佐渡で母をさがした。当初は役人たちに頼んでさがしてもらっていたが、見つからなかったので、自分ひとりでさがすことにした。すると、母にめぐりあうことができた。これも、山椒大夫に功德を回向したことが、はたらいていると考えることができる。

以上のことから、心を悲しみから開放するための手がかりとして、「信」、「縁起」、「常見・断見の克服」、「捨」、「平等」、「廻向」、を浮き彫りにすることができた。

なかでも、そのスタートとなる「信」を心に起こすことや「縁起」によって自分が成り立っていることを把握すること、さらには「常見・断見を克服すること」は、日々の生活の中で、自然体でつかむ必要がある。無理につかもうとすると、心は淨らかではなくなるのである。そこに、「身念の行」や「八正道」という実践の重要性がある。

今後は、その「身念の行」や「八正道」の具体は文献にどのように示されているのか、精査していくことにしたい。

尚、鴟外の『山椒大夫』には、安寿が身に付け、厨子王に渡した小さな地蔵菩薩像を「放光王地蔵菩薩」と記していた。調べていくうちに、日頃、ウォーキングで歩く道を少し伸ばしたところに、その地蔵菩薩を祀ってある祠のあることがわかった。何という奇遇であろう。これも、仏のはからいによるものであろうか。さっそく出向いてみると、鎌倉時代から伝えられていると説明されていた。地蔵菩薩像が現在に受け継がれ、大切に守られていることを心強く感じた。

¹ 菩薩 『菩薩の願い』（丘山新・NHK ライブラリー）91 頁による。

菩薩は、サンスクリット語の bodhisattva ボーディ・サットヴァが、菩提薩埵（ぼだいさつた）と音写されたもので、菩提（bodhi 悟り）を求める薩埵（さつた）（sattva 衆生）の意味がある。菩提薩埵は略して「菩薩」といわれるようになった。

・古代インドで紀元 1 世紀頃に始まった大乘仏教運動を進めていた人たちは、修行時代の釈迦牟尼

- (釈迦)が「菩薩」といわれていたことになぞらえ、悟りをもとめて修行している自分たちのことも「菩薩」と呼ぶようになった。
- ・仏教は、もともと紀元前5世紀頃、釈迦牟尼によってひらかれたが、それを受け継いだ人々が、菩薩となって紀元1世紀頃に起こした新たな仏教を大乘仏教という。
 - ・大乘仏教では、菩薩があらゆる人々の苦を救う、人々は仏や菩薩に救いを求める、という内容が盛り込まれた『般若経』『無量寿経』『法華経』などの大乘経典が菩薩たちによって創出された。
 - ・大乘とは、あらゆる人々を乗せて悟りにみちびく乗り物のことを大乘ということによる。日本に伝来したのも、この大乘仏教で、中国・百済(くだら・朝鮮半島にあった国家)を経由して日本に伝わった。それに対して、釈迦以来の伝統的な教えを伝えている仏教を大乘の人たちは小乗と呼んだ。小乗仏教は、スリランカや、タイ、ベトナムなどの東南アジア諸国に伝わった。
- 2 仏像 アレキサンダー大王の東方遠征(紀元前334年～前323年)によって、ギリシャ彫刻の影響を受けるようになり、ガンダーラなどで仏像がつくられるようになった。
- ・浄土教では、仏や浄土の具体的な様相を想起し、想い描くことで功德を積み、罪障(ざいしょう=悟りを得たり極楽に往生したりするための障害となる悪い行い)を滅して、往生を目指した。(『岩波仏教辞典第二版』181頁「観想」)
 - ・菩薩信仰 菩薩の像を拝み、救いを願うことが菩薩への信仰を深めることになったと思われる。
- 3 大乘仏教 注1参照
- 4 菩提心 菩提は悟りの知恵のことで、これを得た者が仏であり、これを目指す人々(有情・衆生)を菩薩という。菩提心とは、悟り(菩提)を求める心や、悟りを得たいと願う心のこと。(『岩波仏教辞典第二版』923頁「菩提」、924頁「菩提心」)。
- 5 自利 自分を利する。自分に福利を与える。
- 6 一切衆生 一切はあらゆるという意味で、衆生は迷いのある生きているもののこと。一切衆生で、生きとし生けるもののこと。
- 7 利他 他を利する。他人に福利を与えること。
- 8 六波羅蜜を行じて 波羅蜜(はらみつ)は菩薩の実徳目で、六種で構成するのが六波羅蜜。布施(ふせ)波羅蜜、持戒(じかい)波羅蜜、忍辱(にんにく)波羅蜜、精進(しょうじん)波羅蜜、禪定(ぜんじょう)波羅蜜、般若(はんにゃ)波羅蜜(または智慧波羅蜜という)の六つ。行じては、修行しての意味。「六波羅蜜を行じて」は、六波羅蜜の修行をして、の意味になる。
- ・波羅蜜…pāramitā パーラミター 迷いの世界から悟りの世界へ至ること。菩薩が行う修行。
 - ・布施…dāna ダーナ 施し与えること。施すものの内容により、衣食などの物質を与える(財施)、教えを説き与える(法施)、怖れをとりのぞいてやる(無畏施)、にわけられる。
 - ・自戒…śīla シーラ 戒律を守ること。在家の場合は五戒(もしくは八戒)、出家の場合は律に規定された禁戒を守る。
 - ・忍辱…kṣānti クシャーンティ 耐え忍ぶこと。
 - ・精進…vīrya ヴィーリヤ 努力すること。
 - ・禪定…dhyāna ディヤーナ 特定の対象に心を集中して、散乱する心を安定させること。
 - ・般若…prajñā プラジュニャー 布施～禪定の五波羅蜜を成就することによって智慧を完成すること。
- 9 成仏(じょうぶつ) 真理に目覚めて悟りをひらくこと。(『岩波仏教辞典第二版』544頁)
- 10 菩薩 大乘仏教では、最高の悟りを求める心(菩提心)をおこして、自らの修行の完成(自利)と一切衆生の救済(利他)のために六波羅蜜を行じて成仏をめざす人はすべて菩薩なのである。(『岩波仏教辞典第二版』922頁)。
- 11 衆生(しゅじょう) 一切の生物。原語はサンスクリット語の sattva サットヴァで、六道輪廻する生きもののことをいい、衆生(玄奘以前の訳)や、有情(新訳=玄奘以後の訳)と訳した。(『岩波仏教辞典第二版』502頁)。
- ・六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という生き方。
 - ・輪廻とは、生死を繰り返すこと。
 - ・六道輪廻とは、生きているものは、業(ごう・体験)の果(善果・悪果)によって六道のどれかに生まれ変わり、生死を繰り返すこと。それが苦の要因となる。
 - ・衆生は六道輪廻の世界に生きるもので、生まれながらに苦を背負っている。その輪廻から抜け出すことが解脱(げだつ)であり、悟りを得たとき、そうなる。

- ・菩薩は輪廻の世界から脱しようとして一切の衆生を救済するという誓願を立てて、修行をする。誓願がかなったとき（誓願が満たされたとき）、菩薩は輪廻から解脱し仏となることができる。
 - ・衆生はそのような菩薩に救済されることを願い、願いがかなったとき、輪廻から解脱できる。
 - ・衆生がいることで菩薩は解脱することができ、衆生も菩薩がいることで解脱することができる。
- 12 慈悲（じひ） 仏がすべての衆生に対して生死輪廻の苦から解脱させようとする憐愍（れんみん）の心。「慈」は友愛の意味をもち他者に利益や安楽を与えること（与楽）。「悲」は他者の苦に同情し、これを抜済（抜苦）しようとする思いやり。
- ・大乘仏教では、仏と同じ慈悲にもとづく利他行が、菩薩修行者の全員に要求される。慈悲は菩薩の誓願にも示されるが、その究極は、自己の悟りよりも衆生の抜済を先とする点にあるとされる。
 - ・さらに大乘では慈悲の根拠を空性（くうしょう）に求める。たとえば、布施を行うには、施者も受者も施物もすべて空寂（分別や煩惱や執着を除去した静かな境地）であるとき、はじめて功德（果報）を生ずるが、それを三輪清浄（さんりんしょうじょう）という。『岩波仏教辞典第二版』452頁。
 - ・空性（くうしょう） *śūnyatā* シューンヤター 空であること。固定的実体の無いこと。『般若経』は、悟りや涅槃（ねはん）をも含むあらゆるものごとに対する無執着のあり方を「空」と呼んだ。『岩波仏教辞典第二版』238頁
 - ・涅槃（ねはん） *nirvāṇa* ニルヴァーナ 煩惱の火が吹き消された状態の安らぎ、悟りの境地。『岩波仏教辞典第二版』807頁
- 13 菩薩の誕生 『菩薩の願い』（丘山新・NHK ライブラリー）88頁による。
- 14 シャーンティデーヴァ Śāntideva（寂天）は、インド7世紀後半の人とされ、『学処要集』を著す。『学処要集』は中観（ちゅうがん）の実践を説く。「中観といえば空の思想である。」『学処要集』の中で、シャーンティデーヴァは同書を「菩薩の修練の手引き」と表明している。『講座大乘仏教第7巻・中観思想』（田村智淳・中観の実践—寂天の『学処要集』252頁・280頁）。
- ・シャーンティデーヴァは、竜樹（りゅうじゅ・Nāgārjuna ナーガールジュナ、150–250頃）の著作『中論』を基本典籍とする中観派（ちゅうがんは）に分類される。
 - ・中観派とは、「物質的・精神的なあらゆる事物に本体（svabhāva 自性）がないと説き、ものを恒常であるとする見解（常見…ものごとにはあり続けると見る）と、ものは断滅するという見解（断見…ものごとは終わってしまうと見る）の二つの辺見を離れた、中道をのべる仏教学者」と『宝環』にいう。『梶山雄一著作集第四巻・中観と空』202頁 203頁
 - ・竜樹は、中観に関して、「縁起をわれわれは空性と呼ぶ。それはまた要素や素材を取っての表示（仮名＝けみょう）であり、それこそが中道である」（『中論』第24章・第18偈）といい、「縁起」と「空」と「中道」とをほぼ同義語とした。『岩波仏教辞典第二版』705頁「中観」
 - ・縁起とは、縁によって生起すること。大乘仏教では、縁起する諸法の本質が空であり、個別の特徴をもたず（無相）、それゆえすべての執着を離れる（ことができること）の必要性を強調した。竜樹は、諸法は無自性であるから縁起し、また縁起するから自性をもたず空であるとした。『岩波仏教辞典第二版』95頁「縁起」
- 15 法護 962 - 1058 インドの仏教学者、訳経家。1004年インドから中国に行き、勅命によって經典を漢訳。日稱らとシャーンティデーヴァ作の『シクサーサムッチャヤ（Śikṣāsamuccaya）』を翻訳し『大乘集菩薩学論』を著す。
- 16 日稱（-1126）法護の死後、翻訳を続けて、『大乘集菩薩学論』を完成したものと思われる。『国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一・大乘集菩薩学論・解題』
- 17 『山椒大夫・高瀬舟』森鷗外作・岩波文庫…「山椒大夫」6～50頁。放光王地蔵菩薩は46頁
- 18 説経節（せつきょうぶし）鎌倉時代の末、室町時代初期のころ節付説教から派生した民間芸能。『岩波仏教辞典第二版』604頁「説教節」
- 19 「山椒大夫首塚説明版」より 引用先…<http://f.hatena.ne.jp/omma/20140311112528>
- 20 「山椒大夫首塚説明版」より 引用先…<http://f.hatena.ne.jp/omma/20140311112528>
- 21 『山椒大夫・高瀬舟』森鷗外作・岩波文庫…「山椒大夫」47頁。
- 22 勸善懲悪（かんぜんちやうあく）よい行いをはげまし、悪い行いをこらしめる。『角川新字源』129頁。…勸善懲悪は時代劇でよく取り上げられるテーマで、人々は娯楽として楽しんできた。
- 23 諸行無常（しよぎやうむじやう）諸行とは、すべての作られたもの、あらゆる現象の意。それが無常、すなわち、常ではなく移り変わってゆくと説く。われわれの認識するあらゆるものは、直接的・

間接的なさまざまな原因（因縁）が働くことによって、現在、たまたまそのように作り出され、現象しているにすぎない。ところが、いかなる一瞬といえども、直前の一瞬とはまったく同じ原因の働くことはありえないから、それらの現象も同一ではありえず、時の推移とともに、移り変わってゆかざるを得ない。『岩波仏教辞典第二版』554頁「諸行無常」

- 24 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』4頁
- 25 菩提心 注4参照
- 26 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』7頁
- 27 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』4頁
- 28 自灯明・法灯明 釈迦の遺言として、次の言葉が言い伝えられている。
「自らを灯明とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、真理（法）を灯明とし、真理をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」『岩波仏教辞典第二版』449頁
- 29 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』97頁
- 30 須菩提（しゅぼだい） 釈迦十大弟子の一人、スーティのこと。
- 31 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』62頁
- 32 三摩鉢底（さんまはつてい）『新版・仏教辞典（法蔵館）』175頁b「三昧」
- 33 三摩地行（さんまじぎょう）『新版・仏教辞典（法蔵館）』175頁b「三昧」
- 34 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』6頁
- 35 深心（じんしん） すべての善行を身につけようとする心 『新版・仏教辞典（法蔵館）』166頁a
- 36 捨 心をかたよらせず、平静、平等にたもたせる心作用。『新版・仏教辞典（法蔵館）』221頁a
- 37 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』63頁
- 38 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』64頁
- 39 差本 差…癒える。病気がなおる。『角川新字源』312頁「差」
・差本で、癒えるもと。
- 40 信心 仏の教えを信じて疑わない心。信じる心は教義や理論に対し自ら確かめて確信する信 śraddhā と、人格神などに対し主観的に個人的に信じる信 bhakti との2種に大別されるが、仏教の信は前者と言われる。信は修行の第一歩と考えられ、智慧を完成させるための前提となる。
・教えを聞いて確信し了解する信 adhimukti は信解（しんげ） 勝解（しょうげ）と訳される。『岩波仏教辞典第二版』572頁「信心」
- 41 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』8頁
- 42 『大乘集菩薩学論（中野義輝訳）・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』170頁
- 43 諍（じょう） 各自の意見が衝突して一致しないとき、言論をもって勝敗をきめるために議論して争うこと。『新版・仏教辞典（法蔵館）』259頁a
- 44 和合（わごう） 実・徳・業・同・異の意義を共同的に関係づける原理。『新版・仏教辞典（法蔵館）』205頁a
- 45 生滅（しょうめつ） 生起（しょうき・ものの存在が成立すること）と滅尽（めつじん・ほろびること）の併称。因縁が和合して（あらゆる条件が満足されて）成り立っている一切のもの（有為法）は移り変わる性質のもの（無常）であるから、かならず生滅がある。『新版・仏教辞典（法蔵館）』271頁c
・しかし、大乘では「不生不滅」をいう。いかなるものも、自ら存在させるものはないからほろびることもない、と。『般若経典』は「すべては空にして、固有の特徴をもたず（無相）それゆえ不生にして不滅である」と語る。不生であるから不滅としかなりえない。不生となるのは、ものの成立はそのものに自性（じじょう・みずからを成り立たせるもの）があるからではなく、他からの縁起によって成り立つと観察することによる。ものが在るように見えるのは、自性があるからではなく、縁起に因ると観る。それが空性を観察することになる。すべは無自性であって、空なるものであり、空なるものであるから縁起する。それは不生を意味し、不滅を証することになる。
・竜樹は『中論』で、このことについて、すべての存在物は自分自身からも、他者からも、両者からも生じることはなく、また原因をもたずに生じることもあり得ないと論じ、それゆえすべての存在物は不「生」であると結論づけた。『岩波仏教辞典第二版』862頁863頁による。

- 46 虚妄 (こもう) 真実でないこと。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』139 頁 b
・虚妄分別 (こもうぶんべつ) もの真相を誤って妄りに思惟し識別 (分別) すること。
- 47 空性 (くうしょう) 空とは、一切法は因縁によって生じたものであるから、そこに我体・本体・実体と称すべきものがなく空しいこと。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』87 頁 c
- 48 因縁 (いんねん) 因と縁。結果を生じさせる内的な直接の原因が因で、外からこれを助ける間接の原因が縁。一切の存在は因縁によって生じ因縁によって滅する。『新版仏教辞典 (法蔵館)』24 頁
- 49 三法印 仏教教理の特徴をあらわす三つのしるし。あらゆる現象は変化してやまない (諸行無常)、いかなる存在も不変の本質を有しない (諸法無我)、迷妄の消えた悟りの境地は静かな安らぎである (涅槃寂靜) の三つをいう。『岩波仏教辞典第二版』400 頁
- 50 『大乘集菩薩学論 (中野義輝訳)・国訳一切経印度撰述部瑜伽部十一』171 頁
- 51 菩提 注 4 参照
- 52 慈 注 12 参照
- 53 善逝 (ぜんぜい、sugata スガタ) 如来の別名。迷いの世界をよく超えて出て、再び迷いに還らないもの。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』355 頁 a 「如来」
- 54 調御丈夫 (じょうごじょうぶ、puruṣadamyasārathi プルシャダムヤサーラティ) 如来の別名。衆生をよく調伏制御して悟りに至らせる者。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』355 頁 a 「如来」
- 55 正理 一般にインドでは論理学のことをニヤーヤ (nyāya 正理) というが、仏教では因明 (いんみょう) と呼ぶ。因とは理由、明とは学問の意味。理由を示して論証を行う論理学のこと。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』25b
- 56 身念処 浄・楽・常・我の四顛倒 (四つの誤った見解) を打破するための修行がそれぞれ、身念処 (身体の不浄性を観察)・受念処 (感覚の苦性を観察)・心念処 (心の無常性を観察)・法念処 (法の無我性を観察) で、合わせて四念処という。『岩波仏教辞典第二版』451 頁 「四念処」
・身念処は、浄の誤りを正すために、身体が不浄なものであることを観察する。その意図は、どこにあるのだろうか。浄らかを求めると、心地よさを感じていつまでも続けようとする常見に陥る。それが誤謬となり、煩惱の働きを増すことになる。中道の実践は、そのような常見から離れることを重要視しているので、不浄性を観察することを行っていたと思われる。
- 57 顛倒 (てんどう) viparyāsa ひっくりかえること。真理にもとった見方・在り方。誤謬 (ごびゅう)。『岩波仏教辞典第二版』742 頁
- 58 八正道 (はっしょうどう) 苦の滅に導く八つの正しい実践徳目。釈迦の最初の説法 (初転法輪) で説かれたという。1) 正見 (しょうけん・正しい見解)、2) 正思 (しょうし・正しい思惟 (ゆい))、3) 正語 (しょうご・正しい言葉)、4) 正業 (しょうごう・正しい行い)、5) 正命 (しょうみょう・正しい生活)、6) 正精進 (しょうしょうじん・正しい努力)、7) 正念 (しょうねん・正しい思念)、8) 正定 (しょうじょう・正しい精神統一) の八つをいう。『岩波仏教辞典第二版』828 頁
- 59 奢摩他 (しゃまた) śamatha シャマタの音写。止。心を一つの対境に止めて想念を息 (やす) め心を凝らすこと。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』68 頁 c 「観」
- 60 毘鉢舍那 (びばしゃな) vipaśyanā ヴィパシュヤナーの音写。観。智慧によって対象を照見すること。観察ともいい、観念ともほぼ同義。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』68 頁 b 「観」
- 61 縁起 注 14 の「縁起」「竜樹」を参照。
- 62 身念の行 注 56 の「身念処」を参照。
- 63 常見・断見 注 14 の「中観派」を参照。
- 64 捨 注 35 参照
- 65 信 心所 (しんじょ・心のはたらき) の名。心を澄んだ浄らかなものにする精神作用。『新版・仏教辞典 (法蔵館)』277 頁 c

(受理日 : 2019 年 3 月 9 日)